

## プログラム・ノート

大井 駿

### 弦楽四重奏曲第5番 イ長調 作品18-5

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)が初めて世に出した弦楽四重奏曲(作品18)は、6曲のセットとして1798～1800年に作曲され、自身のパトロンだったロプコヴィッツ侯爵に献呈されました。1801年7月、彼は作品18について、親友カール・アマメンダへの手紙に「最近やっと正しい四重奏の書き方がわかった」と語っています。ベートーヴェンは弦楽四重奏というジャンルについて、過去の作曲家のモデルを研究し、自信を獲得していきました。中でも本作は、モーツァルトの弦楽四重奏曲第18番(K. 464)をモデルに書かれたとされています。**第1楽章**はモーツァルトの影響が色濃い軽快なアレグロ、**第2楽章**は簡潔で古典的なメヌエット。**第3楽章**は、ハイドンの弦楽四重奏曲作品20-2をモデルにして書かれたとされている変奏曲、そして活気に満ちた**第4楽章**で幕を閉じます。

### 弦楽四重奏曲第4番 ハ短調 作品18-4

同じく作品18のセットに含まれる第4番は、全6曲の中で唯一の短調作品です。かつてはこの曲だけ様式的に異質であるとして、古い時期に作曲されたものを流用したのではないかと疑われていましたが、近年のスケッチ帳の研究により、1799年6月以降に他の曲と共に作曲されたことが判明しています。ベートーヴェンの他の作品に見られるように、彼はハ短調を、伝統的な様式を打ち破り、激しい感情を前面に押し出す調として用いました。情熱的で緊迫感のある**第1楽章**、緩徐楽章ではなく「アンダンテ・スケルツォ(諧謔的に)」で書かれた**第2楽章**、そして**第3楽章**では再び仄暗い表情を見せ、**第4楽章**ではジブシー風の雰囲気が始漂っています。

### 弦楽四重奏曲第12番 変ホ長調 作品127

晩年のベートーヴェンが改めて弦楽四重奏曲に取り組み始めた、その幕開けの作品が第12番です。ロシアの音楽愛好家ガリツィン侯爵からの依頼を受け、1825年に完成しましたが、同年3月の初演は波乱に満ちたものでした。ベートーヴェンの盟友イグナツ・シュパンツィヒ(1776～1830)率いる四重奏団は、前衛的で複雑なこの曲を弾きこなせず、不評に終わったのです。激怒したベートーヴェンは奏者を呼びつけ、「今後は全力を尽くして演奏する」という誓約書にサインさせたと言われています。その後、別のヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ベーム(1795～1876)を迎えて入念なりハーサルを重ねて再演、大成を収めました。荘厳な導入と豊かな叙情性をもつ**第1楽章**、変奏曲の**第2楽章**、複雑なリズムと対位法が光る**第3楽章**。**第4楽章**は行進曲風に始まり、自由で流麗な形式美を携えたフィナーレです。

(おおいしゆん・指揮者、ピアニスト、古楽器奏者)

## プログラム・ノート

大井 駿

### 弦楽四重奏曲第2番 ト長調 作品18-2

1798年から1800年にかけて書かれた作品18の6曲のうち、実際には3番目に作曲されたと考えられています。第1楽章は、第1ヴァイオリンの優雅な装飾を伴う動機で始まり、その雰囲気から「挨拶四重奏曲」とも呼ばれてきましたが、上品な音楽であることにとどまらず、続く楽章に見られるように、若き作曲家の機知と逸脱がすでに顔を覗かせているのです。第2楽章では、深い情緒を湛えたアダージョが途中で突然アレグロへ転じ、軽妙で諧謔的な世界を挟んで再び静けさへ戻るといふ、極めて大胆な構成が現れます。第3楽章は活気に満ちたスケルツォ。第4楽章は推進力のあるフィナーレで、古典的な枠組みのなかに新しさが息づいています。

### 弦楽四重奏曲第16番 ヘ長調 作品135

1826年秋に完成した、ベートーヴェン最後の弦楽四重奏曲です。甥の自殺未遂や自身の病などの厳しい状況のなかで書かれたましたが、音楽は古典的な均整と透明さをたたえています。第1楽章では、各楽器が短い動機を受け渡し、親密でユーモラスな対話が繰り広げられます。第2楽章は、裏拍への強いアクセントと執拗な反復が支配する、熱狂的で異様なスケルツォ。第3楽章は、変ニ長調による短い変奏曲で、澄み切った折りのような静けさが広がります。そして第4楽章には「重き決心」と記され、「そうするしかないのか？そうするしかない！」という問答が刻まれています。知人が楽譜の借用代金を出し渋った際の冗談から生まれたという証言もありますが、そのような境地を超えた音楽が広がっています。

### 弦楽四重奏曲第14番 嬰ハ短調 作品131

ベートーヴェン自身が友人カール・ホルツに「自分の最高傑作」と語ったとされるのが、この第14番です。最大の革新は、7つの楽章が切れ目なく続けて演奏されること。伝統的な構成は完全に解体され、全体がひとつの巨大な有機体として再構築されています。ちなみに、楽譜を出版するシュット社に「あちこちから盗んできた断片の寄せ集め」と冗談めかして知らせ、のちに「あれは冗談で、全く新しい作品だ」と書き送っています。第1楽章は、ワーグナーが「音楽で表現しうる最も悲痛な憂愁」と呼んだフーガ。続く第2楽章はニ長調の軽やかな舞曲風音楽です。短いレチタティーヴォ風の第3楽章を挟み、第4楽章ではイ長調の長大で神秘的な変奏曲が作品の中心を形づくります。第5楽章はプレストのユーモラスなスケルツォ、第6楽章は短い悲歌のような音楽。そして第7楽章では、嵐のような主題が激しく展開され、壮絶な終結へと向かいます。

(おおい しゅん・指揮者、ピアニスト、古楽器奏者)

## プログラム・ノート

大井 駿

### 弦楽四重奏曲第3番 ニ長調 作品18-3

6つの弦楽四重奏曲(作品18)として書かれ、1801年にはその中の第3番として出版されましたが、研究により最初に作曲されたことが判明しています。記念すべき第1番にならなかった背景には、初演に携わったシュパンツィヒの助言があったとされています。彼は、第1ヴァイオリンが単独で大きく跳躍する風変わりな幕開けについて、保守的な聴衆や評論家の批判を浴びる恐れがあると考えたのです。第1楽章はその跳躍をもつ動機で穏やかに始まり、第2楽章では主調のニ長調に対してかなり遠い調にあたる変ロ長調が用いられ、ゆったりと旋律が紡がれます。第3楽章は弾むような躍動感を持ち、第4楽章は推進力に満ちた華やかな疾走感とともに駆け抜けます。

### 弦楽四重奏曲第11番 ヘ短調 作品95「セリオソ」

1810年に作曲されたこの弦楽四重奏曲は、自筆譜の冒頭に作曲者自身が書き込んだ「Quartetto serio」に由来しています。16曲の弦楽四重奏曲の中でも比較的短い作品ですが、その密度は異様なほど高く、全楽器が一斉に下降する荒々しい動機で始まる第1楽章、チェロが導く静かで不穏な第2楽章、鋭く攻撃的な第3楽章へと、緊張が途切れることなく積み重なっていきます。献呈先は、変わったあだ名で呼び合い、頻繁にワインを無心するほど遠慮のない友情で結ばれたニコラウス・フォン・ズメスカル。テレゼ・マルファッティへの求婚が拒まれた時期の作品ともされ、ベートーヴェン自身が「ごく少数の愛好家のために書いたので、公開の場で演奏されるべきでない」と語ったことから、求婚を拒否された事実と無関係ではないことが窺えます。第4楽章は悲劇的に閉じるのではなく、むしろ軽やかな幻影のように終わります。

### 弦楽四重奏曲第8番 ホ短調 作品59-2「ラズモフスキー第2番」

1806年、ウィーン駐在のロシア大使ラズモフスキー伯爵の依頼で作曲された3つの弦楽四重奏曲からなる作品59の第2曲です。同時期のスケッチブックに「耳が聞こえないことを、もはや芸術においても秘密にしてはならない」と記していますが、その表れのような第1楽章は、力強い和音が2回打ち鳴らされた直後に沈黙が置かれ、張り詰めた緊張感を生み出します。ゆったりとした第2楽章について、弟子のチェルニーは「満天の星空を眺め、宇宙の調和と神の摂理について瞑想して作曲された」と語っています。第3楽章の中間部では依頼主に敬意を表し、ロシア民謡『スラヴァ』(栄光あれ)が各楽器の複雑な絡み合いの中に組み込まれています。付点のリズムが特徴的な第4楽章は明暗を往還しながら加速したのち力強く終わります。

(おおいしゅん・指揮者、ピアニスト、古楽器奏者)

## プログラム・ノート

大井 駿

### 弦楽四重奏曲第6番 変ロ長調 作品18-6

「作品18」の最後を飾るのは、古典的な明快さとベートーヴェン特有の実験精神が鋭く交錯する作品です。第1楽章は、第1ヴァイオリンとチェロが躍動的な主題を掛け合い、活気に満ちています。第2楽章は変ホ長調のアダージョで、優美な旋律が細やかな装飾を伴って歌われます。第3楽章はシンコペーションを多用し、拍節感が意図的にずらされるユーモアにあふれたスケルツォです。そして最大の特徴は第4楽章です。冒頭に、「ラ・マリンコニア」(憂鬱)と作曲者自身が名付けた半音階的で迷っていたアダージョの序奏が置かれ、当時の評論家たちを「迷宮のよう」と驚かせました。この「最大限の繊細さを持って演奏しなければならない」と指示された重苦しい序奏部と、それに続くドイツ舞曲風の軽快なアレグレットの主部が、終盤で何度も交替して現れるという、当時としては異例の奇抜な構成を持っています。ベートーヴェンがすでに初期の段階で、極端な感情の対比とそれを統合する独自の語法を確立していたことを示す重要な作品です。

### 弦楽四重奏曲第15番 イ短調 作品132

ロシアの熱狂的なアマチュアのチェロ奏者ガリツィン侯爵の依頼で、1825年7月に完成した、全5楽章からなる作品。作曲中の同年春、ベートーヴェンは重い腸の病に倒れ、一時は死を覚悟しましたが、厳格な食事制限(ワインと香辛料の禁止)によって回復し、その体験が作品に刻印されています。第1楽章は、チェロによる神秘的な序奏から情熱的で悲劇的な主部へと突入します。第2楽章は、中間部にバグパイプを思わせる響きに乗った田園舞曲風の楽想を持つスケルツォで、保養所バーデンの田園風景を彷彿とさせます。第3楽章は、「リディア旋法による、病癒えし者の神への聖なる感謝の歌」と記されており、古い教会旋法を用いた深遠なコラールと、「新しい(生きる)力を感じながら」と指示されたニ長調の喜びに満ちたアンダンテが交替して進みます。第4楽章は明るく短い行進曲ですが、突如として劇的なレチタティーヴォへと断ち切れ、切れ目なく第5楽章へと突入します。情熱的なフィナーレの主題は、本来交響曲第9番に用いる素材としてスケッチされたものを転用したことが判明しています。初演はシュパンツィヒ四重奏団により行われ、当時の筆談帳には奏者との過酷なりハーサルの様子が残されていますが、初演は大成功。当時の音楽誌も、「巨匠の尽きることのない幻想が、新たな無尽蔵の泉を開いた」と絶賛しています。

(おおいしゆん・指揮者、ピアニスト、古楽器奏者)

## プログラム・ノート

大井 駿

### 弦楽四重奏曲第1番 ヘ長調 作品18-1

出版上の番号は第1番ですが、実際には作品18の中で2番目に書かれ、出版前に大きく改訂された四重奏曲です。その中には若きベートーヴェンの野心と、のちの飛躍を予感させる劇的な感情表現が垣間見えます。第1楽章は、力強い全楽器のユニゾンで始まり、その短い動機が緊密に展開されます。緩徐楽章の第2楽章のスケッチには、「墓に赴く…絶望…自死…最後のため息」など、シェイクスピアの『ロメオとジュリエット』の墓場の場面を想定したフランス語の書き込みが残されており、静寂と激しさが交錯する音楽が広がります。第3楽章は、予測を裏切るようなアクセントを持つ躍動的な音楽です。第4楽章は、軽やかな主題が各楽器をめまぐるしく飛び交い、圧倒的な推進力をもって駆け抜けます。

### 弦楽四重奏曲第10番 変ホ長調 作品74「ハーブ」

1809年、ナポレオン軍によるウィーン砲撃の中で書かれた第10番「ハーブ」。大砲の音から耳を守るため、ベートーヴェンが頭を枕で覆ったという証言も残ります。同時期の書簡に「私の周囲にあるのは、太鼓や大砲の音、そしてあらゆる人間の悲惨さだけ」と記した彼が、この作品ではむしろ不思議なほど穏やかな表情を保っていることは大変印象的です。愛称の由来となった第1楽章のピッツィカートは、静かな序奏のあと空間をきらめくように行き交い、第2楽章では息の長い旋律が柔らかく歌われます。第3楽章の執拗なリズムを経て、切れ目なく続く第4楽章が変奏を重ねながら静かに影を引くように閉じるまで、全体を貫くのは、戦乱の中でもなお失われない気品と、内に秘めた強靱な意志なのでしょう。

### 弦楽四重奏曲第9番 ハ長調 作品59-3「ラズモフスキー第3番」

1806年、ウィーン駐在のロシア大使ラズモフスキー伯爵の依頼により作曲された3曲セットの最後を飾る作品です。全3曲の試演の際、ライプツィヒの一般音楽新聞の特派員によって「(一般的には理解しがたいであろう全3作のなかで)この作品は例外的に、独創性や旋律の力強さによって聴衆を惹きつけてやまないだろう」と評価されています。第1楽章は、モーツァルトの弦楽四重奏曲「不協和音」を思わせる、ハ長調でありながら調性の定まらない神秘的な序奏で始まり、明るく力強い主部へと移行します。第2楽章は、チェロの持続音の上で、ロシア的あるいはスラヴ的な憂愁を漂わせる旋律が歌われます。古典的な性格を持ったメヌエットの第3楽章を経て迎える第4楽章は、あまりに圧倒的な推進力を持つ長大なフーガ。ヴィオラが提示する主題に始まり、みるみるうちにドライヴ感あふれる展開を見せ、全曲を力強く締めくくります。

(おおいしゆん・指揮者、ピアニスト、古楽器奏者)

## プログラム・ノート

大井 駿

### 弦楽四重奏曲第7番 ヘ長調 作品59-1「ラズモフスキー第1番」

ラズモフスキー伯爵のために書かれた「作品59」の第1曲。まさに弦楽四重奏の概念を根本から覆した革新的な作品です。第1楽章は、本来低音楽器であるチェロが、朗々と雄大な主題を歌い上げるという当時としては異例の幕開けを見せます。第2楽章は、同じくチェロが単音を執拗に連打して開始される、極めて独創的でスケルツォ風の音楽です。第3楽章は、悲哀を帯びた深く重々しい緩徐楽章で、その沈痛な響きは途切れることなく終楽章へと接続されます。そして第4楽章では、依頼主への敬意としてロシア民謡『ああ、これが私の運命なのか』が主題に用いられ、活気に満ちた圧倒的なフィナーレへと展開されます。シュパンツィヒ率いる四重奏団が初演に向けてリハーサルを行う中、こんなドラマがありました。作品の奇抜さ、特に第2楽章の斬新なリズムを見た奏者たちが、こんな音楽は冗談だと言い放ち、難解さに不満を漏らしました。それに対してベートーヴェンは「貧弱なお前たちのことを気にかけて書いていない、これは後世の聴衆のための音楽だ」と反論したと伝えられています。彼の音楽の対象は、もはやサロンの保守的な嗜好のためではなく、未来の聴衆、すなわち我々に向けたものだったのです。

### 弦楽四重奏曲第13番 変ロ長調 作品130「大フーガ付」

ロシアのガリツィン侯爵の依頼により1825年に着手されたこの作品は、伝統的な枠を大きく越え、全6楽章から成ります。多彩で、ときにディヴェルティメント(祝典・宴会用の多楽章構成の組曲)のようにすら聴こえます。第1楽章では緩やかな序奏と速い主部が何度も交錯し、鋭い対比を生みます。第2楽章は暗く切迫したスケルツォ、第3楽章は穏やかなユーモアをにじませ、第4楽章は軽やかなドイツ舞曲。続く第5楽章「カヴァティーナ」は、作曲者自身が「思い出すだけで涙がこぼれる」と語ったほど深い祈りの音楽で、中間部には「ベクレムト(beklemmt 息苦しく)」という異例の指示も現れます。そして問題は、第6楽章として書かれた大フーガです。1826年の初演では第2、第4楽章がアンコールされる一方、このフーガは理解されず、耳が不自由のため近くの居酒屋で知らせを待っていたベートーヴェンが、フーガがアンコールされなかったことを知って激怒したそう。のちに出版社の説得により新しい楽章へ差し替えて出版されましたが、今回は作曲者の本来の構想通りに演奏されます。当時は前代未聞の問題作とされ、あのストラヴィンスキーも「永遠に現代的な作品」と呼んだフーガを、ぜひ体験してください。

(おおいしゆん・指揮者、ピアニスト、古楽器奏者)